

2019年11月10日 川越教会

## 弱さは神の賜物

丸山 勉

**[聖書] ゼカリヤ書 8章 3～8節、9章 9～10節**

主はこう言われる。わたしは再びシオンに来て  
エルサレムの真ん中に住まう。エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ  
万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。  
万軍の主はこう言われる。エルサレムの広場には  
再び、老爺、老婆が座すようになる。それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。  
都の広場はわらべとおとめに溢れ 彼らは広場で笑いさざめく。  
万軍の主はこう言われる。そのときになって この民の残りの者が見て驚くことを  
わたしも見て驚くであろうかと 万軍の主は言われる。  
万軍の主はこう言われる。見よ、日が昇る国からも、日の沈む国からも  
わたしはわが民を救い出し 彼らを連れて来て、エルサレムに住まわせる。  
こうして、彼らはわたしの民となり わたしは真実と正義に基づいて 彼らの神となる。

娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。  
彼は神に従い、勝利を与えられた者  
高ぶることなく、ろばに乗って来る  
雌ろばの子であるろばに乗って。  
わたしはエフライムから戦車を エルサレムから軍馬を絶つ。  
戦いの弓は絶たれ 諸国の民に平和が告げられる。  
彼の支配は海から海へ 大河から地の果てにまで及ぶ。

**[序] クリスマスまであと一ヶ月半**

大分夜などは涼しくなって来ました。私が平日にしている会社でも風邪をひくものがひとりふたりと出てきています。皆様、どうぞ、ご健康にご留意ください。

丁度あと一ヶ月半で**クリスマス**ですね。きょうの午後は、クリスマスの時にこの川越教会に来て下さる音楽ゲストの方と、少しその日に向けて打ち合わせをさせて頂くことになっております。是非、素敵にクリスマス礼拝、また、クリスマスイブの礼拝になるようにお祈りください。お願い致します。

クリスマスは、イエス・キリストがこの世界にお生まれになった日ですね。これは世界史の中の偉人の誕生日ではありません。単に偉大な人の誕生日なら、そのお祝いは私たち自身の生活とは無関係でしょう。けれども、そうではないのですね。聖書は、この方の誕生が、私たち一人ひとり、あなたにとって、その人生に全く新

しい意味を与える日に他なりません。この方のことを、旧約聖書は、この方が生まれるずっと前から様々な預言者が預言をしていました。**イザヤ書**がその代表的な預言者ですけれども、今日の聖書箇所である**ゼカリヤ書**もその一つです。

ここでは、一度イスラエル民族が**バビロニアに捕囚される**という存亡の危機を経験し、しかしその後、歴史が動き帰還することが出来るようになり、破壊された**神殿の再建**と共に、**真実の支配者である救い主(メシア)**を待望する言葉が記されています。しかし、ここで描かれている**新しいエルサレムの幻とメシア像**は、当時の人々が描く、社会的・政治的に強力であり、他国・隣国の上に君臨するようなものでは全くなかったのです。それは本当に驚くべき事柄であったと思いますし、それは同時に、私たちの宗教理解、また生き方に対しても**チャレンジ**があるように私は思います。

### [1] 私の幸せの尺度は何？

私自身の身の事、あまり詳しく話せない部分もあり、そこは察して頂ければと思っているのですが、最近私は時間のやり繰りが思うように運ばず、少し滅入っているところがあります。今**私の両親**は健在なのですが、年齢もかなり高齢で、そろって医療や介護サービスがついた施設に入居しています。そしてこの何週間か、その施設から何度か電話があり、少々心配なことがあり病院で検査を受けて欲しいということで、平日の中でそのような時間が割り込んでくることがありました。

母は歩けませんので車で送迎をします。大きな病院に行くのですが、様々な検査を経なければならず、思ったよりも時間がかかり、朝早めに入っても終わる頃は3時を回ることもありました。一番大変なのは、当の本人の親ですよね。それでも、私も何か心がイラついてしまうのです。これから会社に行こうと思っていたけれども大分遅くなってしまったりとか、ああ、教会のメッセージの準備の時間が潰れてしまったとか、**自分の都合ばかり考えてしまう自分の心**を見せられるのです。そして、次第次第に弱くなっていく母また父を見ているわけですが、会話も少々難しくなっていて、話が噛み合わないことが多くなっているのですが、そんな時、私自身が親にきつい言葉を吐いてしまっていることがあるのです。これでよく牧師なんてやっているな、と自分自身思います。「**神様、助けてください。乗り切らせて下さい。**」というのが私の今の正直な祈りです。もちろん妻もかなり力になってくれますし、教会の皆さんの祈りも感じています。それは本当に感謝です。

私は**結局自分のことしか考えてはいないのではないか**、自分の予定、自分の生活が守られること、心が平安であって脅かされないこと、**安全地帯**にいることを自らの「幸」にしているのではないかと、自分自身の心根を探られるのです。ここではいくら体裁の整ったことを語っていても、実際のお前の生活と心はどうなのだ？と迫ら

れると顔を挙げられない自分なのです。「互いに愛し合いなさい」と言うけれども、あなたには愛がないのではないかと。

## [2] ゼカリヤ書の幻

そんな中で、「聖書教育」誌に従いますと今日は旧約聖書の**ゼカリヤ書の9章**の前半が聖書の箇所になっていましたので読んでおりました。この9章からは新しい展開になり、その前とは切り離されて考えられることが多いようですけれども、先ほど読んで頂きました**8章**の中の言葉にも私はハッとさせられたのです。

ゼカリヤ書は、ユダヤ人の信仰の拠り所であったエルサレム神殿が崩されてしまい、**望みが消えてしまいそうになった人々に、それで終わることがないのだという神様からの幻**を告げている預言書です。12小預言書の一つで、ゼカリヤはもう最後の預言者の一人、今月もう一人学ぶマラキ書のマラキと共に、新約聖書への橋渡し役にもなっています。

その**8章の3節以下**をもう一度見てみますと、こうありました。

「主はこう言われる。わたしは再びシオンに来て

エルサレムの真ん中に住まう。エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ、

万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。万軍の主はこう言われる。エルサレムの広場には再び、老爺、老婆が座すようになる。それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。都の広場はわらべとおとめに溢れ 彼らは広場で笑いさざめく。」

これを耳にした者たちはどんなに喜び、希望を得たことでしょうか！「わたしは再びシオンに来て エルサレムの真ん中に住まう」。これは、あなた方は神様から捨てられてはいないということです。決してそうではない。「わたしは、再建されたエルサレムの広場に、もう人生が短いかもしれない長寿の老爺、老婆を安心して座らせる。そして、その都の広場には子どもたちも少女たちの笑い声も響くのだ」と神様は幻を見せるのです。敢えて力あると思われる成人男子の存在を書いていないのです。この広場の中には、世間的な考え方からすれば“弱さを抱えた人々”が真ん中にいるのです！これは凄いことではないでしょうか。真の神様のご支配が実現する所は、そのような場所なのだ、という幻です。2節には、こう書いてあります。そのために神様の思いがたぎっています。—「万軍の主はこう言われる。わたしはシオンに激しい熱情を注ぐ。激しい憤りをもって熱情を注ぐ。」他の旧約のイザヤ書でも「神の熱心」という言葉がありますが同じことです。神様は言われたことは成し遂げられるのです、ご自身の責任において。

それが**メシア(救い主)**を送るという約束に繋がります。しかし、ザカリアが示したそのメシアとは、これまで普通に考えていたメシア像のイメージとは**全く違うもの**

でした。今日の箇所、9章の9～10節です。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者  
高ぶることなく、ろばに乗って来る 雌ろばの子であるろばに乗って。  
わたしはエフライムから戦車を エルサレムから軍馬を絶つ。  
戦いの弓は絶たれ 諸国の民に平和が告げられる。  
彼の支配は海から海へ 大河から地の果てにまで及ぶ。」

喜び迎えなさい、あなたの王があなたのところに入ってくるから、歡呼の声をあげ、踊るように迎えなさい、と言います。ここでは、**対立する概念**が描かれています。「戦車」や「軍馬」に対して、「ろば」、しかも「雌ろばの子」という言葉があります。そして「戦い」と云う言葉に対しては「平和」という言葉が出てきます。

よくキリスト教は理想主義だ、と言われます。それは絵空事の空想なのでしょうか？—そうではありません！ **このザカリヤの預言、神様の幻は一人の方によって実現した**ではないですか！ その方は、ろばの子にまたがって、大勢の者たち、そこには娘たちも子どもたちもいたことでしょう、その喜び迎える声の中で、都エルサレム、一度は不信仰の故に神様に裁かれ、神殿が崩壊はその象徴とも言えると思いますが、しかし、**正にその場所に、この方イエス・キリストは、入ってこられたのです！**信仰の望みを失いかけていた**イスラエルの都エルサレム**に入ってきたというだけでどれ程大きな意味があったかと思いますが、更に重要なことは、その入り方です。ここでやはり**マタイ福音書の21章（4～9節）**を思い起こしたいと思うのです。

### [3] 主イエスのエルサレム入城

「それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

ここには、やがての**神の国の一つの雛形**があるのではないのでしょうか。ここにあるのは、**喜びの声**です。声を挙げているのは、男たち、女たち、子どもたち、障がい者たち、差別を強いられた者たち、病の者たち、その他皆がいるのです。ここでその中心におられるのは、**今ろばの子にまたがっている主イエス・キリスト**です。イエス・

キリストのパレード。当時のパレードは例えばローマでは凱旋将軍が戦車に乗っていかにも勇ましい形で行われました。今日も東京でパレードがありますね。わたしと同じ歳のひとりの人が、その妻の方と一緒に立派な車に乗って人々に手を振り、また沿道の人も歓声を上げながらスマホで撮影したりするのでしょうか。それをとやかく言うつもりはありませんが、ハッキリしているのは、イエス・キリストのパレードは、世の権力者たちからすれば、滑稽なものだったことです。大の男が小さなろばに跨ってノロノロ進む姿は、嘲笑の的だったと思います。けれども、キリストは敢えて、その形を選ばれたのです。何故でしょうか。今日の招きの聖句が全てを語ってくれているように思えてなりません。マルコによる福音書 10 章 45 節です。

「人の子は仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人の身代金として、自分の命を献げるために来たのである」!

このイエス・キリストのパレードは、十字架に繋がっているのです。この時歓呼の声を挙げている人々も、そのすぐ5日後にこの方が十字架で死なれるなどとは思ってもいなかったことでしょうか。“想定外”です。しかしその“想定外”は、神様の深いご計画であるが故に、恵みの、憐れみの“想定外”です。それが、ろばの子に乗って都に入って来られる姿に象徴されています。

#### [結] 神様からの贈り物としての「弱さ」

ゼカリヤ書 9:9 にあった「高ぶることなく」という語が、マタイの方の「柔和な方」という語と同義語です。またこの「柔和」というのは、優しいという意味合いだけでなく、「抑圧されている」「虐げられている」ということでもあるようです。つまりイエス・キリストは、時の社会や政治に言わば排除されている人々や、この世で疎んじられている存在を無視しない、いやその方々と共に歩む存在として来られたのです。

「共に生きる」という言葉はよく耳にする言葉です。しかしある人が言いました。「共に生きよう」と言う時、もしかしたらその言葉がスローガンのようになって、上から目線のようにないだろうか。自分は安全地帯にいて涼しい顔をしてはいないか」と。あ、私自身のことだ、と思いました。先ほどお話した私のことも正にそうです。真に「寄り添う」ということが出来ない自分を見せつけられます。奥深い「罪」を思わされます。その意味で、神様に語りかけられ良かったと思っています。

私はこの頃思うのですが、「寄り添う」ということは、自分が弱くならないと本当には出来ないのではないのでしょうか？ 自分が沈んでいる時立派な大人や有力者が何か助けてくれたとして、それも感謝なことでしょうけれども、たとえ何も出来なくても、本当に痛みが分かってくれる人が隣にいてくれる方がどれだけ慰めと力になることか。来週は子ども祝福式礼拝を行います。子供が存在というのは、そういう力を持っていると思いますね。「寄り添う力」です。「誰でも幼な子のようにならなければ」というのは、そういうことかもしれないな、と思いました。

キリストは、時の権力者になることを捨て、真に「弱い」者となりました。「罪人」の友になりました。ここに、私たちの救いがあるのではないのでしょうか。主は私たちを捨てず、孤独にせず、どんな時でも私たちに寄り添っていて下さるのです。“強い人”というのは、なかなか弱さを抱えている人に寄り添うことが出来ないのです。

素晴らしい英語の詩があるのです。「苦難の中にある者の告白(A CREED FOR THOSE WHO HAVE SUFFERED)」として、ニューヨーク大学リハビリテーション研究所の壁に掲示されているものだそうです。この作者は不明だそうです、誰も代われない人生の苦悩を経験した信仰者に間違いはないと思います。

**大事を成そうとして、力を与えてほしいと神に求めたのに、  
慎み深く、従順であるようにと 弱さを授かった。  
より偉大なことができるように 健康を求めたのに  
よりよきことができるようにと 病弱を与えられた。  
幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと 貧困を授かった。  
世の人々の賞賛を得ようとして、力を求めたのに、  
神の前にひざまづくようにと 弱さを授かった。  
人生を享樂しようと あらゆるものを求めたのに、  
あらゆることを喜べるように 命を授かった。  
求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。  
神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、  
心の中の言い表せない祈りは すべてかなえられた。  
私はあらゆる人の中で 最も豊かに祝福されたのだ。**

何度でもよく味わいたい詩だと思います。この人は「世の賞賛（評価）」を得ることよりも、今、弱さを与えられたことを感謝しています。そのことで神様の前に跪くことが出来ている、それが自分にとって何よりの幸いであり、祝福なのだ。「弱さ」は神様からの贈り物、そこで、全ての人は繋がる事が出来る。これは、凄い人生の秘密、秘儀ではないのでしょうか。神の子キリストの生き様と死に様はそのことを私たちに語って止まないように思えるのです。私自身へのチャレンジでもあります。

お祈りを致します。